
絶対の約束

絵理

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

絶対の約束

【Nコード】

N2969J

【作者名】

絵理

【あらすじ】

ファンタジー小説

男と女。

そして、両性有具という性別が混在する世界で暮らす平凡な主人公とそんな中でも妙なあの子とのお話

忘れていた約束

大きくなって、いつか会えたとき、

その瞬間から、僕は君のそばを離れません。

これが僕が君と結ぶ絶対の約束。

もし、これが破られるなら、そのときは……………

~~~~~

………最近、なにか視線を感じる………

そう、友人の両性有具に言えば、

「…自意識過剰だよ？りんちゃん。」

鼻で笑われた……。

た・し・か・に！

両方の性をもつ両性有具の彼らから見れば地味としかいえない容姿であることは認めよう。

この世界には三つの性がある。

一つは男。

一つは女。

そして、もう一つ、この世で一番多い両性有具。

むかしむかし、神様が人を作られたとき、男と女しか存在しませんでした。

人は増え、国を作り、個性を持つ集団となっていきました。

そして、いつしか、お互いの文化を認めようとはせず、争うようになっ  
ていったのです。

それを見た神様は大変悲しまれました。

そして、そのような中、神様により力を授かった子が誕生したので  
した。

## 男と女と両性有具（前書き）

こんな世界です

## 男と女と両性有具

…そう、救世主があらわれ、光の雫が落ちたとき世界が変わり、ハーフと呼ばれる両性有具が大半を占める世界になった。まあ、この話には諸説あつて、色々ややこしいので、今はやめておこう。

大切なのは、この光の雫以降、男と女以外に両性有具が誕生したことでことと、男と女では、子がつくりにくくなったことと、ハーフ同士では子ができないので、人口激減したことが重要だといわれている。

両性有具であるハーフはこれまでの人間とまったく異なる点がある点がある。

- 一つ、犬のような耳と尾をもつこと
- 一つ、一人ではホルモン不良になるので、一月周期で男か女どちらかと共に寄り添わなくてはならないこと
- 一つ、そのため、美しい容姿をもつこと。

これだ。

**男と女と両性有具（後書き）**

説明文ですね、これ。

自己満足すみません（爆）

きつとね

神話レベルで美形を証明されてるこの友人は、まさにそれという姿をしている。

ふわふわした細くやわらかそうな栗毛色の髪。

鮮やかな若草色の瞳。

ピンとたった犬のような耳。

ハーフのなかでもなかなかの美形だと私も認めている。

その美形、ユウトにこうもはつきり言われてしまったらそんな気がしてきた。

きつと気のせい。

「あんまり、気にしないほうがいいって！もし、気のせいじゃなくてもなんとかなる！」

……だといいなあ……

なんとかなるって、私はそんな毒舌能天気なユウトに押し出されるように、職場をたった。

きつとね（後書き）

話し進みません？

感って意外に当たる

とはいっても、気になるものは気になるわけで……

家までの約一時間、気が気じゃなかった。

何か起こるんじゃないか？そんな漠然とした不安はついて回るから。

どちらかというと、感は悪くないほうなのだ、私は。

そして、その感は当たってしまった……。。

「あー何事もなく良かったあ……」

そう、つぶやいた瞬間だ。

「……………見つけた……………」

……ん？

なんか聞こえたような？

いや、まさか、気のせい気のせい。

「ねえっ！」

いや、断じて私に声をかけてない。

「ちょっと、無視するなって！」

いや、私じゃない。

認めてしまえば終わりの気がする。

まさにそんな空気を感じた私は、おそらくかけられている声を全力で無視した。

君子危うきに近寄らず、だ。

客引きと露店は全力で無視すると昔から決めている。

「だから、さっ！」

イライラとした声とともに、体が回った。

神様、いったい私が何をしたのでしょうか？

感って意外に当たる（後書き）

ようやく、進みそうです

だれ？（前書き）

自分の名を呼んだ者の正体は？

だれ？

「やっぱり、りんだ！」

振り返った私の目に入り込んだものは輝くプラチナ、大きな三角の耳。

まさしく、ハーフだ。

しかし、残念ながら、プラチナの知り合いはいないのだが……………

また、思いもかけず、声をかけてきたのは子供だった。

相手が子供だとわかった瞬間、一気に力が抜けた。

そんな脱力中の私なんてお構いなしにプラチナ頭は元氣良く私に懐いてくる。

「無視するなんてひどいっ！いつ気付いてくれるかずっとまってたのにー」

あ、やっぱり、見られてたのか……

「ま、待つことは慣れてるから、どーてことなかったけど」

「やっぱり、待つこともできないと、いい旦那になれないし……それができるなんて……僕はきつといい夫になれるね」

………すごい自画自賛。

なんか、キラキラした目でこっち見てるよ

同意を求められてるよ

「あーうん、そーだねえ」

不本意ながら、同意をした。

その瞬間、花が咲いたようとはこのことだろうか？

目のキラキラレベルをあげて、顔を染めながらとんでもないことを言い出した。

「それじゃ、さ、」

「りんの夫にしてよ！」

「約束通り、ずっと一緒にいるのに一番いい方法だよね？」

ちよつと？え？  
なにこの展開？

だれ？（後書き）

お話って難しい…

泣く子にはかないません（前書き）

泣くのはずるいよ、でも、慰めちゃう。

泣く子にはありません

「やっぱり、ドレスは白と緑は外せないよなあ」  
「」

一人で楽しそうだ、この子……

これが他人事なら、にやにやして、祝福の言葉一つでも投げ掛けた  
いところだが、自分の身に降り掛かってきたことといえば、話は違  
う。

180度違う。

私は意を決して、

「あのー、盛り上がつてるとこ悪いんだけど……君、だれ？」

と、言った。

……人ってこんなにこころ表情を変えられるんですね……

さっきまで、頬を染め、ここは天国　　つとでもいいそうだった子が、いきなり、顔面蒼白になった。

「……………なに…それ……………」

あ、泣きそう……………

「……………本当に……………少しも覚えてないの……………」

幻覚か？

捨てられてずぶ濡れの子犬が被った。

人であれば、大抵の人はそうだろうが、泣く子供、震えた小動物にはめっぽう弱い。

私も例に漏れず、だ。

困り果てた私は自然と身をかがめ、震えたプラチナ頭を撫でていた。

「泣くなあゝ……」

よしよし、なでなで。

撫でたことで、目の前の子の震えはぴたりと止まった。

そして、懐かしむように、

「……………やっぱり、変わってないんだね……………」

そうつぶやいた。

「……………8年、ずっとこの日を待ってたのにな……………」

僕だけだったのか……

哀しげなつぶやきを聞きながら、私ははっとさせられた。

(……………あれ？8年前……………？)

泣く子にはかないません（後書き）

主人公何げにひどい（笑）

8年前

8年前

私は今とは違う場所で暮らしていた。

覚えているのは海と山に囲まれた小さな村。

この世界にめずらしく、ハーフのいない村だった。

そんな村から外れた不思議な建物。

高い壁で四方を囲まれた今思うと、牢獄のような大きな建物だった。

人を寄せ付けないその場所で、私は小さな友達をつくったのだ。

でも、それが今日の前にいる子なのだろうか？

確か、あのこの髪は烏の濡れ羽ともいえる、艶のある漆黒だった。

他にも違いがある。

それは瞳。

この子の瞳は紅。

でも、あの子の瞳は白銀だった。

漆黒の髪に白銀の瞳。

それはまるで、夜空の天使なんじゃないかと思うほど美しく感じたはずだ。

そして、幼い私はあの子に名前を付けたじゃないか。

“銀と……。”

## 8年前（後書き）

過去の話もそのうち入れていききたいです♪

落ち着いてくれると有り難い

様子の変わったことなんて一切気付かず、この子は相変わらずのマシガントークだ。

「…………でも、それだけでもうれしい。」

はにかむようなしぐさにはっとなる。

昔、毎日のかよった不思議な建物で会った小さな友達と被ったのだ。

「でも、やっぱり、覚えていてほしかっ……………?」

ようやく、こちらの様子がかわったことに気付いたようだ。

不思議そうに紅の瞳を向けてくる。

そして、私は

「あのさ、もしかして…小さい時、髪の毛黒くなかった？」

核心に触れた。

この子にはこの問い掛けで、息を吹き返したようだった。

さっきまでうつむき加減だった顔はあがり、瞳には光がもった。

「それと、目、銀色じゃなかったっけ？」

そう聞くと、今度は、瞳に涙をためて、

「…黒くて、銀色だったです」

そういうと、泣き出した。

もしかしなくても、私が泣かせた？

落ち着いてくれると有り難い（後書き）

主人公、目の前の面倒ごとにはなにがなんでも蓋をしたい派ですね  
（笑）

## 決めたこと

ぼたぼた……………

音が聞こえそうなほどの大粒の涙が、次から次へと、紅の瞳から落ちてゆく。

……………さっきまでの騒ぎが嘘のように静かに泣き出したのだ。

泣く子には弱い。

あまりの急変に私の頭も心もおいてけぼりだ……………

なんだか、これ以上見られなくて、自然と体が動いた。

この、私の友達だった銀だという、見慣れないプラチナを信じることにした。

そして、昔、はじめてあったときと同じように、そこから連れ出すことにしたのだ。

決めたこと（後書き）

進みませんねえ

## 割合

昔、住んでいた村にはハーフなんていなかった。

それがどんなに特殊な状態か、あの時の私には分かるはずもなく、話の中にだけ聞く、男でも女でもないことが不思議でなかった。

しかも、神話に出てくるほど、綺麗な人達。

幼い私には、なんだか、妖精とか、天使とか、なんだか、まったく自分とはかけ離れた存在に思えてならなかった。

「……………現在、世界には多くの人住んでいるのは知っていますね？」

神話と世界についての授業ほど、実感を感じないものはない。

「その、何％が男で、何％が女で、何％がハーフであるか、予想してみてください。」

先生が、私たちに問い掛ける。

今私の世界は、男と女しかない村が、すべてなのだ。  
そんな空想の生きもののようには感じられない存在が、世界では  
メジャーで、私たちがマイナーなことが理解できない。

「なあ、りん、どのくらいだと思う？」

と、隣の席の男子が聞いてきた。

あ、そういえば、この村の子供って、男子が多いな…倍くらい違う…。

そう思って、

「んー分からないけど、女が一番少ないんじゃない？で、ハーフが

一番多いんでしょう？」

カリカリ……………

鉛筆を走らせ、私が出した数字は

“男〓30：女〓20：ハーフ〓50”

ちょっと大げさくらいがちょうどいいと思って書いた。

隣の男子は

「ふーん、オレはこうだぜ！」

おまえが聞いてきたくせ2「ふーん」とはなんだ？「ふーん」とは？

若干のイラつきを感じたが、おとなしく、そいつの解答を除く。

「男〓30：女〓30：ハーフ〓40」

「な、ありそうだろ？」

得意げな顔をした。

確かに、ありそうだ。

「はい、それでは答えは？」

もったい付けるように、先生は言葉を切った。

割合（後書き）

だらだらつづきます

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2969j/>

---

絶対の約束

2010年11月12日20時16分発行